

ギョエンターの系譜



天野 音色

ギュンターの系譜

ギュンターの系譜

中央護衛連隊長に就任し、間もなくだった。

中央護衛連官舎で父を見かけた。

そしてその横に居た人物が振り向いた時...ギュンターは心底、ギョッ！とした。

「俺の上司の顔を、拝みに来た」

そっくりな顔でブルーの瞳の、父がそう言い、横で振り向くグリンの瞳の...やや老けた、それでもそっくりな顔立ちの男は、陽気に笑う。

ギュンターがその、官舎廊下で固まって居ると、ギュンターの父ラフィアンはギュンターの視線に気づき、横見て告げる。

「俺の、親父だ。

お前にとっては...」

「祖父だな」

そっくりの顔の、グリンの瞳の男はそう笑う。

ギュンターはつい、並ぶと兄弟のような二人に、絶句し続けた。

中央護衛連隊、客間のソファで二人は喋り続ける。

「...息子が上司じゃ、お前もやりにくいだろう？」

祖父の言葉に、父ラフィアンは頷く。

「祝う気にも成れない」

そうだろう。と頷く、グリンの瞳の祖父。

ギュンターは正面で二人を見ながら、俯いた。

さっきお茶を出してくれた部下は、自分含めそっくりな三人の顔見て、持ってきたティーセットのトレーを手から床へ、落としそうに成った。

...つまり、自分も二人そっくりだと言う事だ。

「...どうして今迄紹介してくれなかったんだ？
しかし、紫の瞳とは珍しいな」
祖父の言葉に、父はぶっきら棒に言う。

「見分けがついていいだろう？
大体あんた、予告なく現れるし、使者を送る時に限って留守だ」

祖父は笑った。

「俺だって、遊んでる訳じゃない」
「...それにこいつ（ギュンター）は若年の頃、成人の旅とやらで行方が解らなかったし、教練に入ったかと思ったら近衛に入り、その後いつ尋ねても出動で居ない」

「...近衛官舎に、来てたのか？」
ギュンターの言葉に、二人は顔、見合わせる。
「三度来て全部、留守だった」

祖父の言葉に、ギュンターが頷く。
「手紙で祖父と訪問した事くらい、告げてくれれば良かったんだ」

父は肩竦める。
「...どうせお前が暇な時、親父は捕まらない」
祖父は笑う。
幾つなんだ？
と言う程、若々しかった。

祖父は気づいたように笑う。
「エシャルを喰ってる。
近衛で常食してる、簡易栄養補給若返りの木の実より、もっと効能が高いヤツだ」

エシャルは珍しい植物で、滅多に見つからないばかりか馬鹿高い。

「親父は右の王家の男だからな」
ギュンターは父の言葉に、咄嗟に顔、上げる。
が、祖父はギュンターの反応に素っ気無い。
「...血筋はいいが、身分は大貴族。
大公じゃない」

ギュンターはとうとう、じりじりして呟く。

「...どういう経歴か、いい加減説明してくれないか?!

だって親父は、普通の貴族だろう?!

なんで右の王家の血が流れてるって、教えといてくれないんだ!

そうすれば俺だって近衛でももう少し...」

父と祖父は顔、見合わせ合って肩竦める。

「近衛には全然コネが無い上、アルファロイスのような右の王家のサラブレッドにゃ、顔合わせる機会も無い程端っこに居る」

祖父が素っ気無く言い、父はまた祖父を見つめながら呟く。

「俺は正式には、こいつの息子じゃないしな」

ギュンターはすすった茶を、吹き出しそうになった。

「.....」

父は更に素っ気無く呟く。

「お前も正式には、俺の息子じゃない」

ギュンターがつい、肩怒らせ怒鳴った。

「代々浮気性の垂らして事か?!」

「そう言えばお前も隠し子が居たって?」

祖父が屈託無く告げる。

「女の子だって聞いたな」

父の言葉に祖父が笑う。

「俺の母はこの顔だ。

母の母...祖母は、女の子が二人で男の子はどう頑張っても出来ず、結果...もう子供は無理だと言われ、旅先の素性の知れぬこの顔の男と、やけになって...やった所、母が出来たそうだ。

祖母は旅先の行きずり男とそっくりな顔の母を、どうやっても誤魔化せないと思い、旦那に隠してひっそりと田舎に、母と乳母とを匿った。

母は四歳まで乳母と二人で、森で暮らしていたそうだ」

祖父はそう言い、ギュンターの顔を見るので、ギュンターは続ける。

と軽く顎しゃくる。

「だが中の上程度の家柄で、男の子が産まれて家名を上げる事を切望した旦那は、男の子に恵まれずせめて娘が、玉の輿に乗る事を期待したが...。
産まれた娘二人は、気立ては大層いいが、美貌には恵まれず...。

どう頑張っても、美人で更に、性格までいい上流の女達には勝てない。
としよげてたらしい。

が旦那は娘二人が大層可愛かったから、身分高い男を娘で釣る事は諦めたが、上級に仲間入りする夢は捨てきれなかった。

...で、森に隠れ住む母に、白羽の矢が当たった。

母は...この顔だ。

本家に移り、連日素晴らしいドレスを着て上流のパーティに送り込まれ、見事...「右の王家」の男を射止めた。

俺の、父だ」

言って祖父はまた、ギュンターを見るので、ギュンターは続けろ。
と見つめ返す。

「さっきも言ったが父は、「右の王家」と言えどあまり...位は高くない。
だが「右の王家」の一族だったから、ツテだけは豊富にあった。
それで俺も、宮中護衛連隊に入れた」

「...宮中だったのか?!」

ギュンターは自分の部下になるとは言え、王族か大貴族の血統しか入れない、宮中護衛連隊には特別な、違和感を感じていた。

身分の低い自分には決して、入る事の出来ない連隊だった。

ギュンターの父ラフィアンは、その声にぼそり。と呟く。

「宮中に入りたかったのか？」

...俺も一時在籍していたが」

ギュンターは目だけ、見開いた。

そして恨みがましく二人を見る。

「...俺の身分がへ低いと、近衛じゃ随分嫌がらせを受けたし、中央護衛連隊長に成ったのだから、近衛の身分高い奴らと険悪な仲になったから、左將軍ディアヴォロスが俺に中央護衛連隊長の地位を与え、喧嘩になって相手を殺しても縛り首にならないよう配慮したんだ」

二人は顔、見合わせる。

「...言ったろう。

俺は近衛に顔が利かない」

祖父は言ったし、父も同様。

「近衛には丸でツテが無い」

ギュンターはつい、二人を睨み、続けろ。祖父に顎しゃくる。

祖父は口開く。

「俺は「右の王家」の血を引く父が、王家の者だとどれくらい堅苦しく苦勞するか、言い続けているのを毎度聞かされた。

俺の居た頃、宮中はやっぱり身分高く顔のいい男がふんぞり返ってたが、そいつらと仲良くは出来ず、最終的には宮中出身者が勤める別部署。

王宮の勢力図を見張る高等王宮機構に、コネを頼って引き抜いて貰った。

宮中では俺だけがモテまくるんで、殆どの男に敵意を抱かれてやってられなかったからな。

高等王宮機構は身分も能力も高い、粋な男が多かったから、顔がちょっといい位の俺をやっかんだりしない、居心地の良い部署だった。

...言わば表向きは舞踏会に出るのが仕事。

が、王宮警備の首脳部の一部署だ」

ギュンターは初めて聞くその部署の名に、疑問をぶつける。

「...王宮警備は表向きは、宮中護衛連隊だろう？

裏があるのか？」

祖父は無然。と呟く。

「宮中護衛連隊は単なる、実働部隊だろう？」

ギュンターは俯く。

父も畳みかける。

「中央護衛連隊で宮中護衛が全て、賄えるか？

中央護衛連隊は主に対外向き。

高等王宮機構は、内部の陰謀や小競り合いに気を配る。

宮中護衛連隊とは、秘密裏にやり取りしてる。

一応中央護衛連隊長とも連携を取る事もあるが...

中央護衛連隊は、護る範囲が広い。

王宮護衛迄、全部やれ。

と言われたら、中央護衛連隊長のなり手が無くなる」

ギュンターは項垂れる。

「...なる程...」

が、父と祖父は顔、見合わせる。

「結果、お前も中央護衛連隊に縁が出来たな」

父が言うと、祖父が笑う。

「この血筋で近衛に進むのは、珍しいと、笑ってたからな」

ギュンターは二人を睨んだ。

「...親父も中央護衛連隊には、深い縁があったのか？」

「中央護衛連隊の、公領地護衛連隊に居た。

...後に宮中護衛連隊へ行き『光の塔』付き連隊に移り、その後神聖神殿隊付き連隊に一時在籍して...結果今は、公領地護衛連隊の、補佐人員だ」

「.....つまり俺の...部下...なのか？」

父は大きく、頷く。

ギュンターはブルーの瞳の、自分そっくりな父の顔、見ながらぼやく。

「だが...これだけそっくりな顔だ。

あんたが俺の親父だと、知っていそうな公領地護衛連隊長ライオネスは、俺に何も言わないぞ？」

「補佐人員を専門に呼び出したり配置する担当官は知ってるだろうから、お前と会ったらきっとびっくりするだろうが...

彼も、あまり表には出ない。

特殊で面倒な案件のみに動く部署だからな」

「その補佐メンバーは、隊長のライオネスも...知らないのか？」

「担当官くらいは知ってるだろうが...所属人員の顔迄は、知らないだろうな」

ギュンターは俯く。

「...奥が、深いんだな」

この中では一番陽気な祖父が、眉寄せ顔しかめて小声で囁く。

「...近衛に行った。と聞いて思ったが...お前、かなり馬鹿なのか？」

そして祖父は何うように、父ラフィアンを見る。

ラフィアンは肩竦めてみせる。

ギュンターはきっ！と二人を見た。

「幾ら同じ顔で祖父だろうが、初対面の相手にそこ迄言われる言われはないぞ!!!」

父はおもむろに呟く。

「...だって近衛の次が、中央護衛連隊長みたいな苦勞の多い職だろう？」

そして二人は顔を見合わせ、無言で頷きながら

『馬鹿だ』

と心の中で言い合ってた。

「好きで中央護衛連隊長に就任したんじゃない！」

「選択出来ない程切羽詰ってた訳だ」

ギュンターはぐうの音も出ず、顔揺らし、下げ、俯いた。

祖父は孫のその様子を見、頷く。

「まあ、中央護衛連隊長がどれ程大変か、言った所で今更だな」

父も、頷く。

「成った以上、やるしかない」

だがギュンターは、中央護衛連隊を良く知る二人が、どれ程大変かを事細かに話出さず、ほっとした。

成ったばかりだ。

苦勞は覚悟していたが、具体的に語られると逃げ出したくなるから、詳細を二人から聞かされず、どれだけほっとした事か。

二人は項垂れるギュンターを見、呟く。

「...大変だとは、知ってるようだな」

「まあまるきりの、馬鹿じゃないか」

ギュンターが、顔上げる。

そっくり同じ顔の、ブルーの瞳とグリンの瞳が自分を、見つめていた。

「...紫の瞳だと、もっと気取った感じに見えるのにな」

祖父が言うと、父も言った。

「気障に見える。

それで余計に反感買いやすいのかもな」

二人は顔見合わせて頷いていて、ギュンターは脱力して再び顔、下げた。

父が、言った。

「この顔は、男には大抵好かれない。

俺も親父に会うまでは、男友達が出来なかった」

ギュンターは心...と気づいて、顔上げる。

「あんたはどうして...じいさんの正式な息子じゃないんだ？」

じいさん。と呼ばれても同じ顔の若々しい祖父は気にも留めず、口開く。

「本人に聞け」

父ラフィアンは顔、下げる。

そして口を開いた。

「俺の正式な父は、血が繋がってない」

ギュンターは顔揺らす。

「それってつまり...あんた、母親が浮気して出来た子って事か？」

ラフィアンは顔上げ

「ばあさんの、時と同じだ。

夫婦の間に子供が出来なかった。

何年も。

子供がどうしても欲しかった母はノイローゼ気味で....

たまたま出会ったこの、軽い祖父と関係を持ち...」

祖父が肩竦める。

「たったの一夜だったのにな。

出来ちゃったらしい」

「ばあさんの時同様、俺は完全に親父似で、母にも、血の繋がってない父とも当然、似てないから...」

祖父が付け足す。

「夫婦は長年待ち望んだ妊娠を、心から喜んだ。
が、こいつの母はずっと...もしかしたら俺の子かも。
と疑念を抱き続けたそうさ。
育ち始めるとこいつの顔は俺そっくりで、旦那は完全にキレた。
が、相手の俺は「右の王家」の血筋だ。
更に...子供が欲しかった愛妻から、子供を取り上げる事が出来なかった」

ギュンターは気の毒げに父を、伺い見る。

「...苦労したか？」

父は吐息吐く。

「義理の父は普段、近寄りもしなかったな...。
が、俺が崖から落ちそうに成ったり...木の枝から落ちそうに成った...危ない時だけは凄い勢いで駆けつけて...助けては、くれた」

「...いいヤツだな...」

ギュンターが呟くと、父も頷く。

「全くだ。
事情が分かり大人になった時、義理の親父には感謝しか、湧かない」

ギュンターは、祖父を見た。

「それでもあんたは彼を、引き取らなかったのか？」

祖父は吐息吐く。

「こいつの母親が、やっと授かった子供を手放すか？
引き取っても良かったが...俺にも妻子がある。
第一...絶対子供が出来ないから、一晩でいいから情けをかけてくれ。
と言われたんだ。
...それでどうして出来るのか、聞きたいのはこっちだ」

祖父の言葉で、ラフィアンもギュンターも男として気持ちが解りすぎて、同時に溜息を吐き出

した。

父は小声で言葉を続ける。

「...まあ、あんまり俺が、男親と親交が無い上、男友達も出来ず喧嘩しかしないから...母が、実父の彼と...引き合わせた。

以来...突然現れては、遊び相手になってくれたし...男でも、外見で判断しない奴とは、友達に成れると教えてくれた」

「...意外と、子煩悩なんだな」

祖父に言うと、祖父は肩竦めた。

「...俺の子は、上が男で下が女。

が、どっちも俺に似てない。

これだけ似てると...気にかかって性が無い」

ラフィアンも、頷く。

「俺もギュンターに出会った時、あんたの気持ちが解った」

祖父が『そうだろう』と頷く。

ギュンターは、二人を見て顔がそっくりの娘を思い浮かべた。

彼女は母と...父親代わりの母の恋人で満足し、自分を必要としない。

がやはり...いつも心の片隅に、引っかかっていた。

彼女に...困った事が起これば自分も多分...飛んで行くだらう.....。

「...で...この顔は、身持ちが悪いのか？」

ギュンターが、ぼそりと尋ねると、祖父は肩竦める。

「親父の武勇伝を聞いたのか？」

ラフィアンは即座に返す。

「俺は、話してない」

父の言葉に、ギュンターがぼそっ...と囁く。

「...だってあんた、婚約者が居たのにお袋と寝たんだらう？」

祖父が見つめると、ラフィアンは顔、下げる。

それで祖父が、代わって言った。

「まあこいつは、女に『寝て』と言われたら断れない」

ギュンターが、下目遣いで顔上げ、そっと聞く。

「スケベだから？」

祖父が笑う。

「女に甘いから」

ギュンターが、頷く。

「...自分の子じゃないのに、一度寝ただけの女に
“あんたの子”だ。

と言われ、押しつけられても引き取るしな」

父ラフィアンはそっぽ向いて、ばっくれた。

ギュンターは俯き加減で尋ねる。

「...だから...お袋に頼まれても断れなかったのか？」

ラフィアンは溜息交じりに告げる。

「婚約者が居て、直彼女と結婚する。

と言ってるのに...それでも。

と言われりゃ...

無理だとも言った。

惚れないだろう。とも。

一度きりでこの後の付き合いは出来ない。と迄」

ギュンターは顔を深く、下げた。

自分もそう言って、それでも...

と寄って来る女を山程...抱いたからだ。

「...で？」

「浮き名を流しまくったのか？」

ラフィアンがやはり、即座に返す。

「お前もだろう」

ギュンターは一言も、言い返せなかった。

祖父が孫を労る。

「まあ近衛は...それでなくとも女が群がるしな」

ラフィアンは下げた顔から、チラリ...とそう言う祖父を、睨んだ。

が祖父は無視して息子の遊び人ぶりを披露する。

「公領地護衛連隊から宮中に移ったのも、身分の高い女がもっと頻繁に、こいつに会いたいと思って無理矢理移動させた。

公領地じゃ、暇持て余してる年増の身分高い女と、遊び放題だったろう？」

ラフィアンは、むっ。とした。

「...相手から誘って来るし、旦那に警備不行き届きだといちゃもん付けられても、俺のコネで毎度何とかなっただぞ！」

ギュンターは顔、下げた。

『公領地護衛連隊は、暇なご婦人の相手をどれだけするか。

で、旦那の見当外れのいいかがりから逃れられる』

とディンダーデンに聞いていたからだ。

勿論、愛妻家のディンダーデンの兄、ライオネスは、寢室の相手は断って、それ専門の騎士を代わりに送り込むそうだが。

もし婦人の相手をしてなかったら、公領地護衛連隊の顔ぶれは、身分高い旦那が警備不行き届きを怒鳴り込む度、クビを言い渡されて変わっていただろう。

「呆れた部署だな」

かつて自分がそう感想を、ディンダーデンに告げたその連隊に、父が居たとは。

が、ふと『宮中護衛連隊』に移った。と聞いて、顔上げる。

「王宮警護では...」

祖父はくすくす笑った。

「こいつは垂らしまくってた」

が父ラフィアンは、祖父を睨む。

「あんたも宮中護衛連隊で、垂らしまくったろう？」

祖父は肩竦める。

「あそこはそういう部署だ。

俺の居た頃は、身分高く腕っ節も強く見目も良く...。

女達が『宮中護衛連隊』の名でどれだけ心、ときめかせた事か...！

今はどうやら、顔だけいい身分高いクズが、体面の為入ってるようだな」

ギンターはグーデン思い浮かべ、その通りだと顔、下げて頷いた。

「こいつはずっと男から顔が柔だと喧嘩ふっかけられ続け毎度、受けて立ってたから腕っ節は強いと認められ一時、『光の塔』付き連隊も所属し、重要人物の護衛を割り振られてた。が、あそこは『影』とも、付き合いがある」

父、ラフィアンは顔、下げる。

「...正直、ついて行けなくなった」

ギンターは自分が戦った『影』思い出し、顔下げる。

「...ぞっとするバケモノだから？」

が父ラフィアンは顔上げる。

「いや？」

呪文が長すぎて更に難解で、覚えるのが最悪に面倒だったからだ。

始めは良かった。

先輩らがそりゃ長けていたし、『光の王』が『影』なんか寄せ付けない。

が、『光の王』の力がお年で衰え始めて以来、俺も呪文を覚えろ。

と言って来るんで試したが、丸でモノに出来ない。

結果、「後任を探してくれ」

と言って辞職し、神聖神殿隊付き連隊に移ったが...あっちは短い呪文が使えればいい。

神聖神殿隊騎士はデカくて美形で皆荒っぽいんで、気は、合ったな」

ギンターはふと...始めの偶然の出会いから、父が自分の経歴話すのを聞くのは初めての事だな。

と顔上げる。

いつも...俺の事ばかり、父は聞いていた。

どうしているのか。と。

「...だが、結果宮中に戻ったんだろう？」

「婚約してな。

ふとした紹介で地元の女に出会った。

身分がそこそこ良い。

美人じゃない。

...俺も多分、疲れていたんだろうな。

彼女はとても、居心地良かった。

空気のように俺を包んでくれる。

多分、『光の塔』付き連隊に行かなきゃ、そんな事にも気づきもしなかった。

で、結婚を考え、国中走り回る神聖神殿隊じゃ落ち着かなくて、宮中のコネを頼り、公領地護衛連隊での補佐の仕事を買った。

面倒事の收拾じゃ、出来る奴は限られてるしそこら中にコネが無いと務まらなくて、人員が真剣に不足してると言われて。

お陰で待機が長く仕事は少ないが、一旦出動となると確かに厄介だ」

「仕事の内容、聞いて良いか？」

ギュンターが言うと、祖父は笑った。

「中央護衛連隊長としての、職務の為か？」

ラフィアンはうんざり気味で囁く。

「折角身内で居るんだ。

仕事の話から離れられないのか？」

ギュンターは言われ、そっくりな顔で目の色だけ違う、二人を見た。

そして吐息吐く。

きっと三人並んで歩いたら、年が少しずつ離れた兄弟に見えるだろう。

そう思うと急に自分が、二人の一番下の弟に思えて俯く。

「...だってあんたら、中央護衛連隊長に成るなんて馬鹿だ。

と思ってるだろう？

俺だって自分が成るなんて思ってなかった」

二人は顔、見合わせて同時に言った。

「そっちの経緯を、聞きたいな」

そして二人また顔を見合わせ、祖父が

「思っていないのに成るなんてアリか？」

と言い、父は

「なんでロクに知らないのに成るなんて、言うかな...」

と言い、結果尋ね顔の二人に、ギュンターは経緯を話し始めた。

途中二人は眉間寄せまくっていたから、かなり...後悔したが。

話し終わると二人は乗り出した身を引き、おもむろに祖父が呟く。

「...成る程。

要するに、北領地[シェンダー・ラーデン]大公子息に惚れたのが最大の原因か...」

と口を濁し、父迄も大きな溜息を付く。

「まあもう一応子供は居るんだから、相手が...だろうが問題ないだろうが.....」

と父は言って祖父を見、祖父も浮かない顔で『そうだな』と、一応相づち打って頷く。

ギュンターは二人の様子に斬り込む。

「...男相手に...しかも北領地[シェンダー・ラーデン]大公なんて大層な身分の子息に、本気で惚れるなんて馬鹿だと、思ってるな?!」

二人同時にギュンターからさっ！と顔背け、その顔には

『その通りだ』

と書いてあった。

— END —

後日、ギュンターは二人から書状を受け取った。

そこには揃って、言葉こそは違うものの

『中央護衛連隊長はお前の“隠し子”か？』

と、知り合い全部に、こっそり聞かれた。

と恨みがましく責めるように書かれてあって、ギュンターは憤慨して羊皮紙二つとも、力一杯床に叩きつけた。

